

(7) コウモリ類 (コウモリ目ヒナコウモリ科)

- ① 対象種
アブラコウモリ等
- ② 生息情報
全集落
- ③ 採録した呼び名
・ 一般的な和名 コウモリ
- ④ 生息及び呼び名の状況



アブラコウモリ

郡内に生息するコウモリとしては人家周辺でよく見られるアブラコウモリのほか、洞窟等に生息する洞穴性のコウモリがいたようであるが、人々がよく目にしたのはアブラコウモリと考えられる。

あまり目にすることはなかったという集落もみられたものの、コウモリ類は郡内全集落に分布し、夕方に空を飛ぶ姿とともに隧道や地域で数多く作られたトンネル状の用水路である「マンボ(※印参照)」等で主に見かけられたという。

コウモリ類の呼び名としては、「コウモリ」の1種を採録した。

郡全域で一般的な和名である「コウモリ」と呼ばれ、他の呼び名はみられなかった。

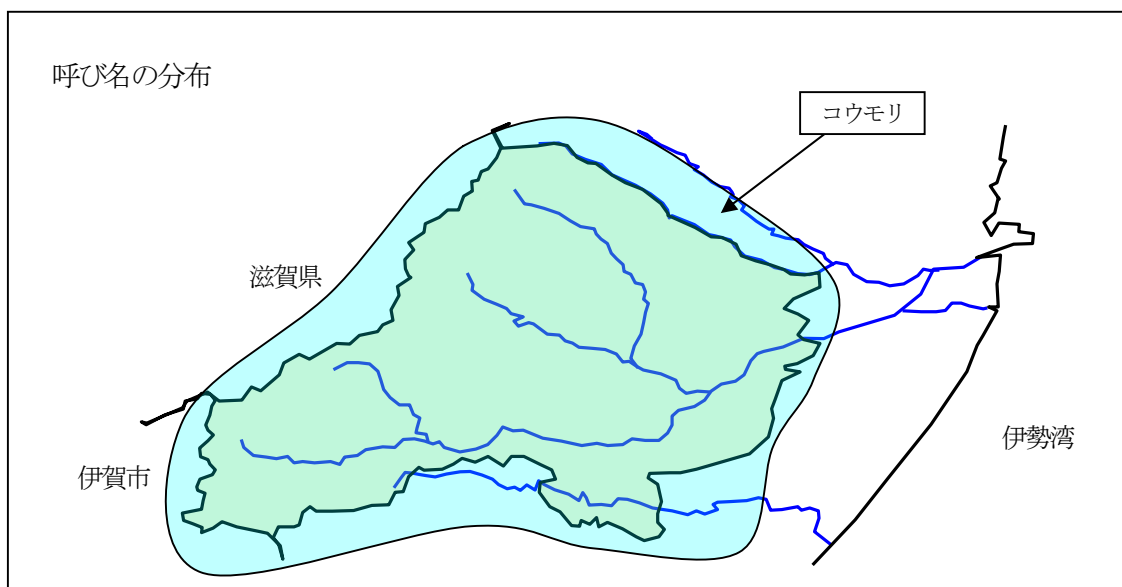
- ⑤ その他

聴き取りから、昔は子ども達が「マンボ」の一方の口から洞内を藁束で追いたてながら進み、もう一方の口から飛び出してくるコウモリを網で捕まえて遊んだという話のほか、次の表現を採録した。

- ・ 「コウモリが家に入ってくると縁起が良くない」と言い、追い出した。

※ 「マンボ」について

鈴鹿山脈の東麓に多く見られる山の斜面等に縦坑を伴いつつ掘られた横井戸を「マンボ」と呼ぶ。江戸時代以降に水田の灌漑や生活用水の確保を主な目的として、地下水脈から直接取水し導水するため、又は池や川といった水源から導水するために造られたものである。



(8) サル (サル目オナガザル科)

① 対象種

ニホンザル

② 生息情報

山間部の集落

③ 採録した呼び名

- ・ 一般的な和名 サル
- ・ 俗称 エテ, エテコ
- ・ その他 (猟師言葉) アニー, アニキ, オキヤクサン, カゴヤサン, ダンナ, ブランコ, ムラノワカイシュウ, ワカイシュウ



④ 生息及び呼び名の状況

近年では生息個体数が増え、山間の集落を中心に人家近くの山林でもしばしば見かけるが、当時は山奥にのみ生息し、狩猟や炭焼きで山に入る猟師や炭焼きの人々だけが見かけたという。

本種の呼び名としては、「サル」や「ワカイシュウ」をはじめ計11種を採録した。

本種を見ることがない一般の人々からは、一般的な和名である「サル」や俗称である「エテ」、「エテコ」と呼ばれた一方、高齢の猟師や元猟師の間では多様な呼び名がみられ、ほぼその全域で「ワカイシュウ」と呼ばれたほか、白川地区周辺では「ブランコ」、野登地区では「ダンナ」、椿地区では「アニー」等とも呼ばれる傾向があり、地域差がみられた。

⑤ その他

聞き取りから、猟師の間では「サル」という表現を嫌ったようで、とりわけ午前中に本種を見た場合は上記の猟師言葉で呼んだという話がみられ、次のような表現を採録した。

- ・ 「サルが出てくると雨が近い」
- ・ 「朝にサルを見かけると験が良くない」



(9) タヌキ (ネコ目イヌ科)

① 対象種

ホンドタヌキ

② 生息情報

全集落

③ 採録した呼び名

- ・ 一般的な和名等 タヌキ, ドタヌキ, ノダヌキ
- ・ 一般的な和名の訛 タノキ, タノケ
- ・ その他 (猟師言葉) ハチ, ハチダヌキ



④ 生息及び呼び名の状況

近年では地域での開発が進み、平野部で見かけることは少ないが、当時は郡内に山林が広がっていたことからほぼ全集落に分布し、昔から民話等でも親しまれてきた身近な生き物である。

本種の呼び名としては、「タノケ」や「ハチ」をはじめ計7種を採録した。

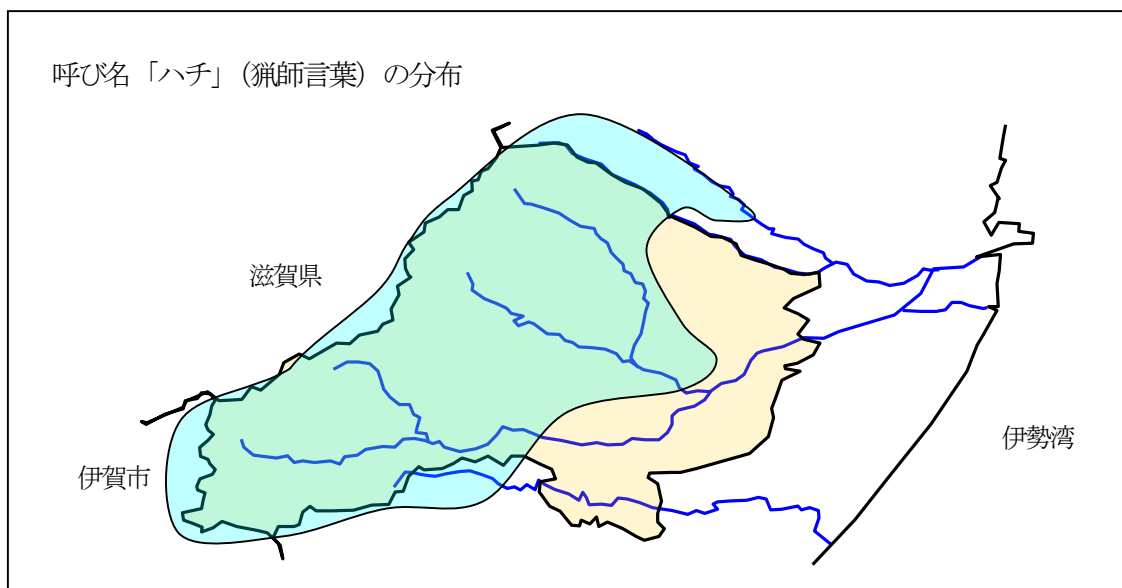
当時、一般の人々からは一般的な和名である「タヌキ」と呼ばれたほか、人によっては「タノキ」又は「タノケ」と訛って呼ばれた。

一方、高齢の猟師又は元猟師の間では、大きさや形態がよく似たアナグマと区別し、「ハチ」又は「ハチダヌキ」と呼ばれた。こうした呼び名は山辺の集落等に在住の一般の人々の間でも知られていたが、アナグマとの間で混同がみられたため、本調査では猟師からの聴き取り結果を踏まえて呼び名の整理を行った。

⑤ その他

聴き取りから、「食べてまずい」、「首巻になる」、「木に登り、体についた砂をふるい落とす」といった話とともに、多くの集落でタヌキに化かされたり騙されたりしたという話がみられ、次のような表現を採録した。

- ・ 山に火が見えると、『タヌキが火をとぼしている』と言った。
- ・ 「昔、陰涼寺山に大タヌキがいて、車を停めた」
- ・ 「タヌキは人等に化けるので、おかしいと思えば足元を払え」
- ・ 「キツネ七化け (ななばけ), タヌケ (は) 八化け (やばけ), カワ (ウ) ソ九化け (ここのばけ), ネコ (は) 十化け (とばけ)」



(10) キツネ (ネコ目イヌ科)

① 対象種

ホンドキツネ

② 生息情報

全集落

③ 採録した呼び名

- ・ 一般的な和名 キツネ
- ・ 一般的な和名の訛 ケツネ
- ・ その他 ノギツネ

④ 生息及び呼び名の状況

近年では地域での開発が進み、平野部で見かけることはほとんどないが、当時は郡内に山林が広がっていたことから広い範囲に分布した。主として平野部の山林で見かけられ、昔から民話等でも親しまれてきた身近な生き物である。

本種の呼び名としては、「キツネ」や「ケツネ」をはじめ計3種を採録した。

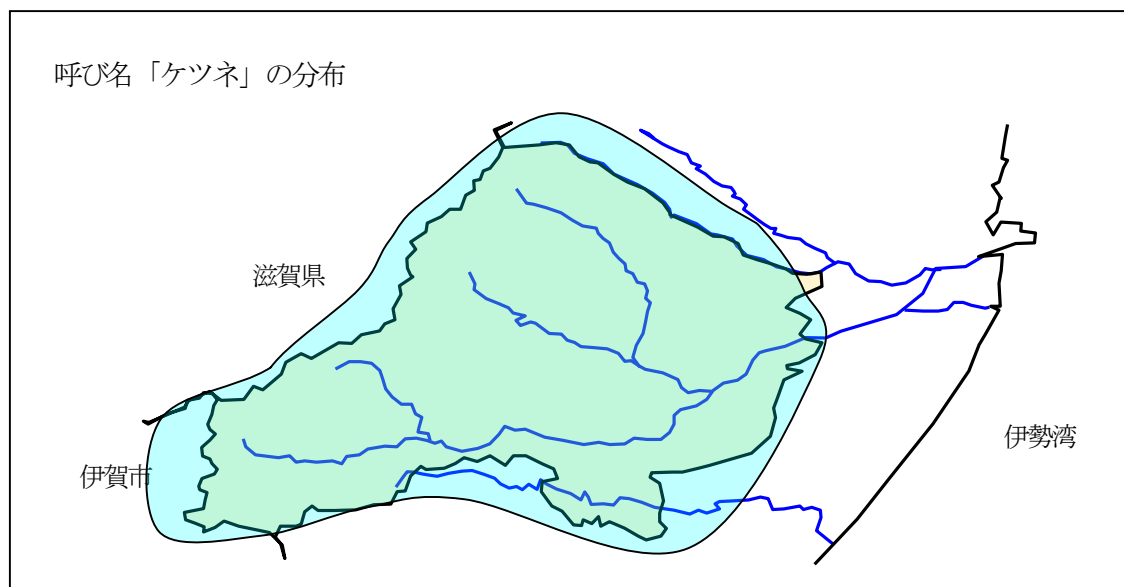
当時、一般的な和名である「キツネ」と呼ばれるより「ケツネ」と訛って呼ばれ、ほぼ全域でその呼び名を採録したほか、異なる他の呼び名はみられなかった。

⑤ その他

聴き取りから、昔話として、キツネに騙され、道がわからなくなったり持参した食べ物になくなったという話が山辺の集落を中心に広い範囲でみられた。また、山の畑に行き、暗くなった夕方に帰る時は、キツネに騙されたり化かされたりしないようタバコに火をつけて帰ってきたという話とともに、所によっては「ゲンナイギツネ」等名前では呼ばれる古キツネがいて人がよく騙されたという話がみられ、次のような表現を採録した。

- ・ 「キツネは人を騙し、タヌキは化かす」
- ・ 「キツネに化かされるといけないのでマッチを持っていけ。おかしいと思えば火をたけ」
- ・ 「キツネ七化け、タヌキ (は) 八化け、カワ (ウ) ソ九化け、ネコ (は) 十化け」

なお、当時は夏になると、年寄りが縁台で子ども達を相手に怖い話とともに、他の村人がキツネやタヌキに騙された話等をしていたという。



(11) カワウソ (ネコ目イタチ科)

① 対象種

ニホンカワウソ

② 生息情報

主して川沿いの集落

③ 採録した呼び名

- ・ 一般的な和名 カワウソ
- ・ 一般的な和名の短縮系 ウソ, カワウ, カワソ
- ・ その他 カワネズミ

④ 生息及び呼び名の状況

かつては、日本全国に生息していた生き物であるが、大正から昭和のはじめ頃の毛皮目的の乱獲に加え、第二次世界大戦後の地域開発、川の水質の悪化や護岸工事に伴う生息環境の悪化等により、近年では生息情報がなく、絶滅が危惧されている生き物である。

本調査では、鈴鹿川中流域から安楽川沿いの集落を中心として当時の本種に関する生息情報が得られたほか、伝聞によるものを含めると全域で半数強の集落から生息情報が得られた。また、当時の高齢者によるさらに昔の生息状況に関する話を記憶する被聴き取り者がいた集落が一定数みられたことから、かつては郡内の本支流において数多く生息していたが、当時においては生息個体数が著しく減少した状態となっていたものと考えられる。

本種の呼び名としては、「カワウソ」や「カワソ」をはじめ計5種を採録した。

広い範囲で一般的な和名である「カワウソ」のほか、「カワソ」と呼ばれ、郡域で一般的な呼び名であったとともに、「ウソ」や「カワウ」と呼ぶ集落もみられた。

なお、水辺にいるイタチの呼び名である「ミズイタチ」、「カワイタチ」について、一部の人から本種と関係があるのではないかという話があった。

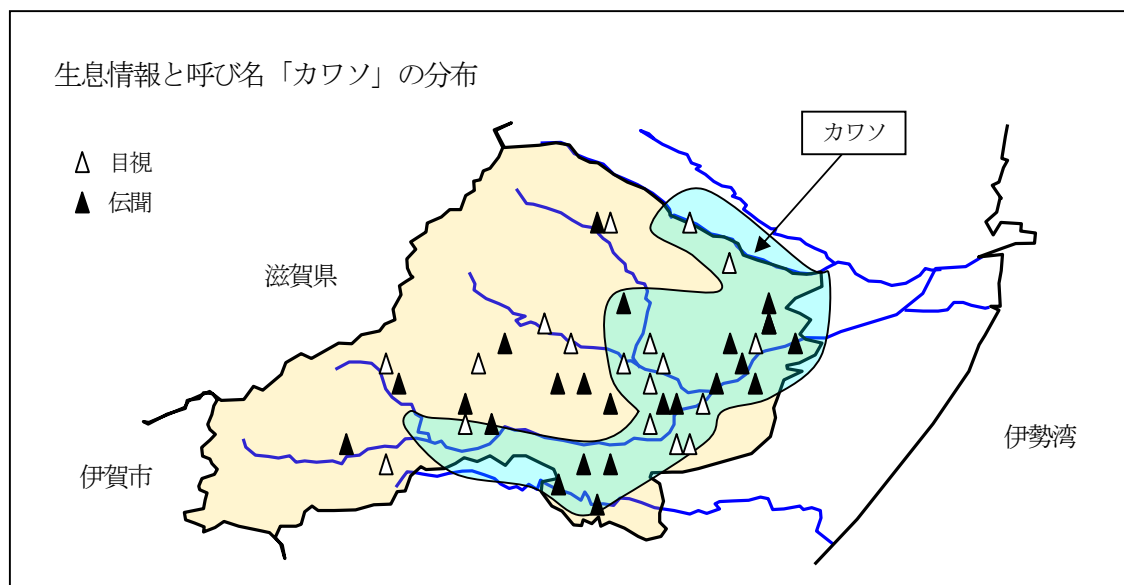
⑤ その他

聴き取りから、酒飲みの人ことを「カワウソ」と呼んだり、当時の年寄りが子ども達に「カワウソにかまれるぞ」と言い川の深みで遊ばないように戒めていたという話がみられた。その他、本種も化けたり、人を騙したりすることがあると言われ、次のような表現を採録した。

- ・ 「カワウソは化ける」
- ・ 「カワウソは人を騙す」
- ・ 「キツネ七化け, タヌキ (は) 八化け, カワ (ウ) ソ九化け, ネコ (は) 十化け」(カワウソは猫の次によく化けて怖いという意味もある。)



昭和54年 須崎市新庄川にて 鍋島昭一氏撮影



(12) アナグマ (ネコ目イタチ科)

① 対象種

ニホンアナグマ

② 生息情報

広い山林のある集落

③ 採録した呼び名

- ・ 穴にいること アナダヌキ
- ・ タヌキとの混称 タヌキ
- ・ その他 (猟師言葉) シク, シクタ, シクマ, シクマタヌキ, シバ, シバダヌキ, ムジ, ムジナ, ムジナダヌキ



④ 生息及び呼び名の状況

近年では地域での開発が進み、平野部で見かけることはほとんどないが、当時は郡内に山林が広がっていたことから広い範囲に分布していたと考えられる。郡内の広い範囲で生息情報が得られた一方、一般の人々の間ではあまりなじみのない生き物であり、本種を認識していない集落も多くみられた。

本種の呼び名としては、「ムジナ」や「シクマ」をはじめ計11種を採録した。

高齢の猟師又は元猟師の間では、大きさや形態がよく似たタヌキと区別した呼び名がみられ、鈴鹿川や加太川、中ノ川の沿いの集落においては「ムジ」、「ムジナ」、「ムジナダヌキ」と呼ばれたほか、安楽川中上流部の野登地区を中心として「シバ」、「シバダヌキ」、御幣川や八島川沿いの庄内地区や椿地区においては「シク」、「シクマ」、「シクマタヌキ」と呼ばれ、地域間で違いがみられた。

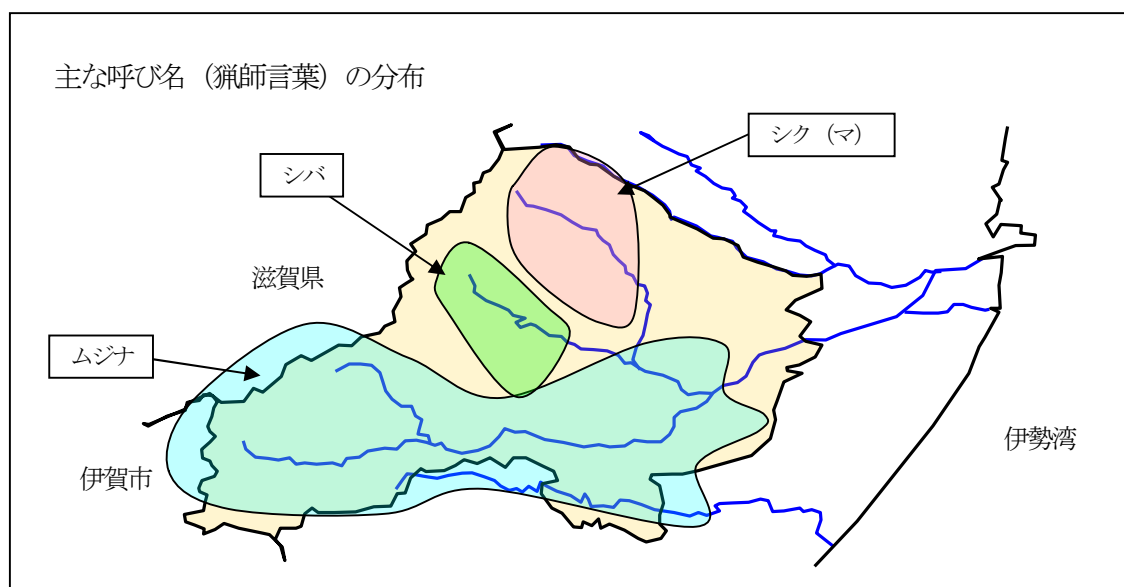
こうした呼び名は山辺の集落等に在住の一般の人々の間でも知られていたが、タヌキとの間に混同がみられたため、本調査では猟師からの聞き取り結果を踏まえて呼び名の整理を行った。

また、「アナダヌキ」という呼び名が散在してみられ、本種の特徴を表した言葉であるので本種として整理したが、タヌキも同様に穴に入るとともに形態が似ていることからそれを含めた呼び名であるとも考えられる。

⑤ その他

聞き取りから、「山にある穴の中において食べてうまい」、「冬眠する」、また「フキの生える時期に出てくる」といった話のほか、次のような表現を採録した。

- ・ 太った人のことを「シクマタヌキのような人」と言った。
- ・ 変わった人のことを「ムジナのような人」と言った。



(13) テン (ネコ目イタチ科)

① 対象種

ホンドテン

② 生息情報

山辺の集落

③ 採録した呼び名

a) 一般

- ・ 総称 テン
- ・ その他 オオキイタチ

b) 猟師言葉

- ・ 体色 (全身が黄色) キテン
- ・ 体色 (黒みがかった) クロイテン, クロテン, スステン, ドロテン



④ 生息及び呼び名の状況

主として鈴鹿山系の山中に生息する生き物であり、生息個体数としては多くなく見かけることは少なかったという。

本種の呼び名としては、「テン」や「キテン」をはじめ計7種を採録した。

通常は山林に生息し一般の人々が目にすることがほとんどない山の生き物であることから、呼び名の調査に当たっては高齢の猟師や元猟師から聴き取りを行い、主として猟師言葉として採録した。

その結果、本種は総称として広く一般的な和名である「テン」と呼ばれたほか、中でも全身が黄色できれいなテンについては「キテン」と呼ばれた。こうした呼び名は山辺の集落に在住の一般の高齢者からも採録され、郡内の山辺の集落でほぼ共通していた。

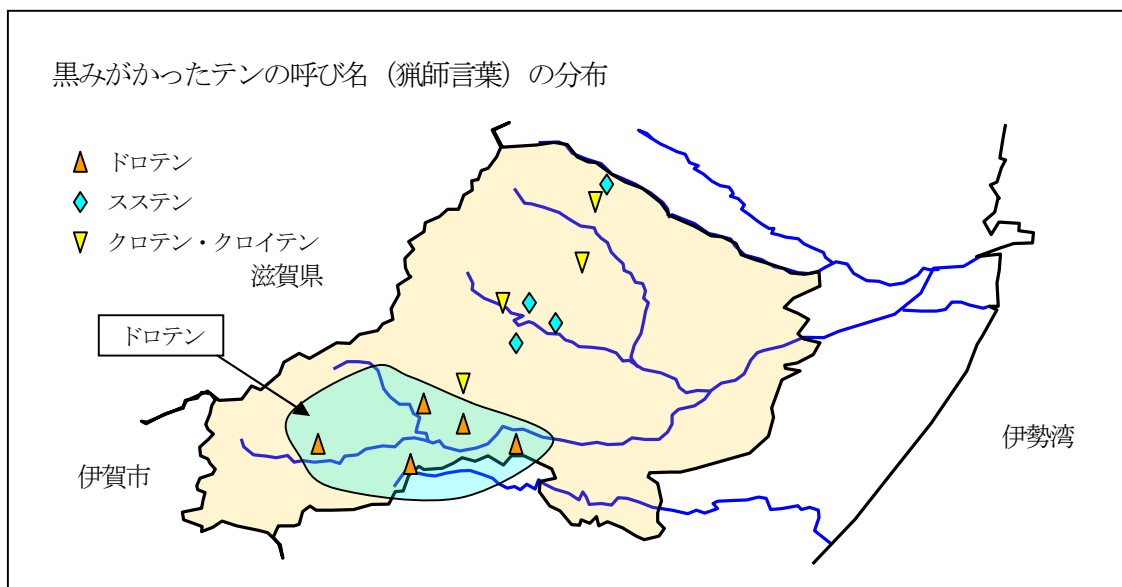
一方、黒色の毛が混じったテンは生息個体数としてはわずかであり見かける機会はより少なかったようであるが、猟師の間では「クロテン」、「スステン」、「ドロテン」等と呼ばれ、地域間で違いがみられた。

⑤ その他

聴き取りから、山辺の集落において稀に人家の屋根裏にも入ってきたという話がみられた。

なお、亀山市布気町や関町中心街では化けたテンを「ケテン」と呼び、子ども達が危険な所に遊びに行かないように戒める妖怪として次のように使われた。

- ・ 「そんな恐いとこ行くと、オオカミやケテンが出るぞ」



(14) イタチ (ネコ目イタチ科)

① 対象種

ニホンイタチ

② 生息情報

全集落

③ 採録した呼び名

- ・ 見かけられた場所 (水辺) カワイタチ, ミズイタチ
- ・ 周囲を見る仕草 カオミセ
- ・ 地面に潜ること モグリ
- ・ 一般的な和名 イタチ



④ 生息及び呼び名の状況

近年では地域での開発が進み、見かけることは少なくなったが、当時は郡内全集落に分布し人家近くや水辺でよく見かけられた身近な生き物であった。

本種の呼び名としては、「イタチ」や「ミズイタチ」をはじめ計5種を採録した。

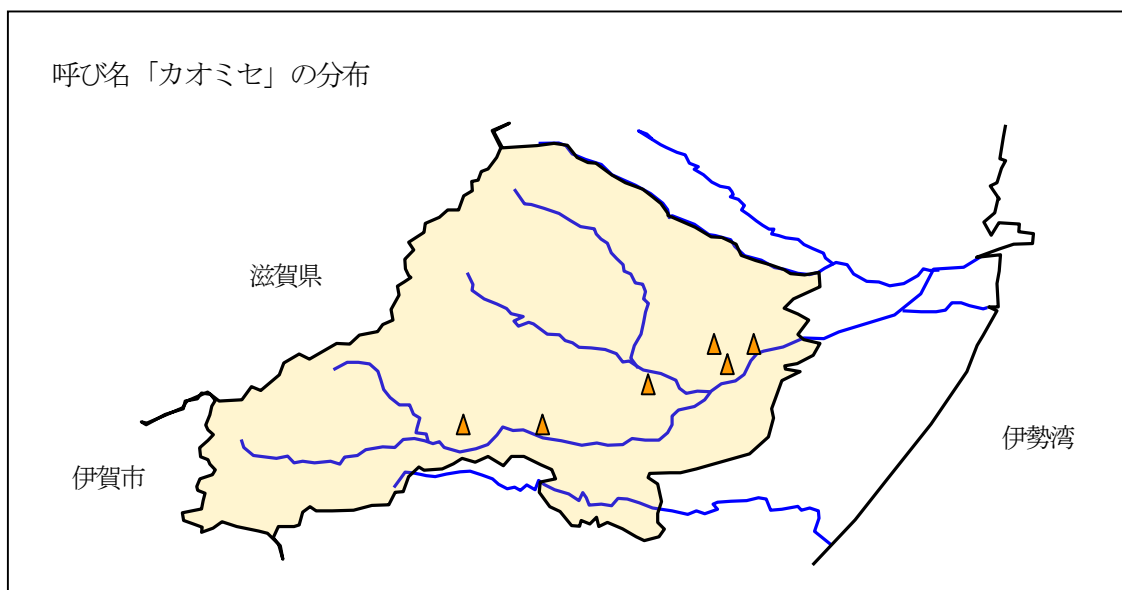
郡内の全集落で現在と同様に一般的な和名である「イタチ」と呼ばれたほか、水辺でよく見かけられたことから、その場合は「カワイタチ」又は「ミズイタチ」とも呼ばれた。

また、立ち止まって周囲を見回す仕草から、旧東海道沿いを中心に「カオミセ」と呼ぶ集落もみられたが、よく使われた呼び名ではなかったという。

⑤ その他

聴き取りから、昔は逃げ足が速い人のことを「ミズイタチみたい」と呼んだり、子ども達がイタチを捕まえ皮を売ったりしていたという話のほか、次のような表現を採録した。

- ・ 男の人の前では「イタチが右から左へ横切ると良いことがある」と言い、逆の場合「道に物を落とす」と言った。女の人の場合は反対となる。
- ・ イタチが前を横切ると「イタチいっぺん顔見せよ」とか「イタチ、イタチ、今の顔見せよ」と言った。
- ・ 「イタチは目が近いから、立ち止まってあちこち見る」
- ・ 「イタチの最後尻 (さいこべ) を嗅ぐと顔が腫れる」
- ・ 「イタチの血は薬になる」



(15) イノシシ (ウシ目イノシシ科)

① 対象種

ニホンイノシシ

② 生息情報

山辺を中心とした集落

③ 採録した呼び名

a) 一般

- ・ 総称 イノ, イノシシ, イノッポ, イノンポ, シシ

b) 猟師言葉

- ・ 幼体 ウリ, ウリコ, ウリゴ, シマ
- ・ 1~2歳の子 フルコ
- ・ 成体 (小→大) サンソク, サンゾク, シソク, ヨンソク, ヨンゾク, ゴソク, オオゴソク, ロクソク
- ・ 子の総称 ガキ
- ・ 子連れの状態 ガキヅレ
- ・ 爪が斑で気性が荒い ウリヅメ, シマヅメ, シロヅメ



④ 生息及び呼び名の状況

人家に近い山林地域に生息する生き物で、近年では生息個体数が増え、山辺の集落でもみられる。当時から山辺の集落では秋の収穫期となるとよく田畑を荒らされることがあったという。

本種の呼び名としては、「シシ」や「イノンポ」をはじめ計23種を採録した。

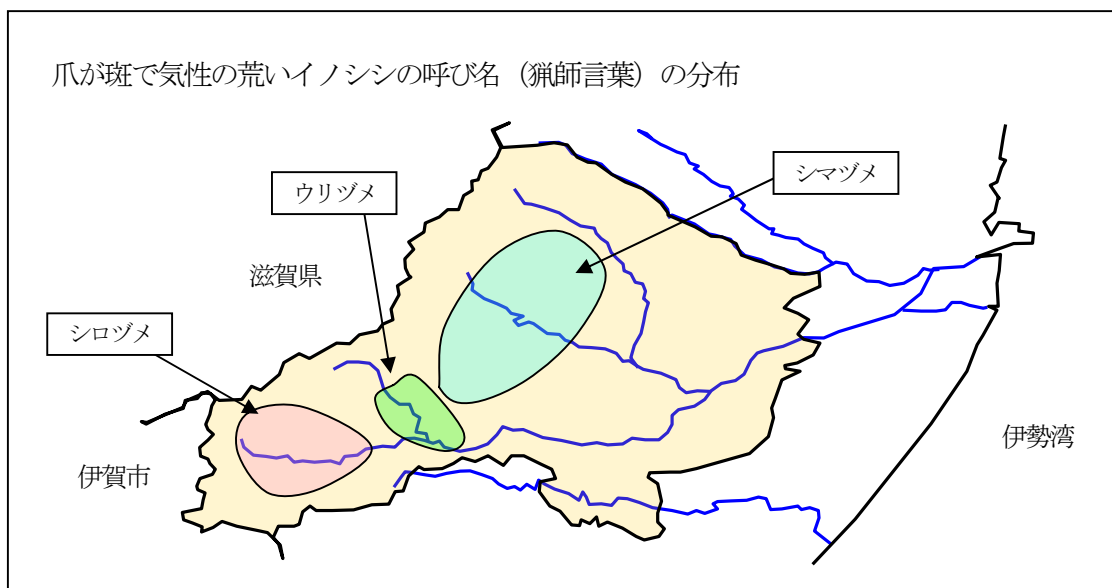
一般の人々からは「イノシシ」、山辺の集落では「シシ」等と呼ばれる一方、高齢の猟師又は元猟師の間では、成長段階や大きさ等により区別された様々な呼び名がみられた。

幼体はその姿から主として「ウリ」、「ウリコ」等と呼ばれるとともに、1~2歳程度になると「フルコ」と呼ばれた。成体は大きくなるに従い「サンソク」、「ヨンソク」、「ゴソク」等と呼ばれ、こうした呼び名は、かつてイノシシの皮によりガンソク等と呼ばれた革の靴(袋)が作られたことから、大きさにより何足取れるかということに由来するという。また、集落によっては更に大型の個体を「オオゴソク」、「ロクソク」と呼ぶ場合がみられた。

なお、子連れの姿がしばしば見かけられたようで、そうしたものは「ガキヅレ」と呼ばれた。

本種のこうした呼び名は郡内でほぼ共通していたが、爪が斑で気性が荒いと言われるイノシシの呼び名については、地域間で違いがみられた。

区分	幼体	1~2歳	(小型)		成体	(大型)
呼び名	ウリ (コ)	フルコ	サンソク	ヨンソク	ゴソク	オオゴソク, ロクソク



(16) シカ (ウシ目シカ科)

① 対象種

ニホンジカ

② 生息情報

山辺の集落

③ 採録した呼び名

a) 一般

- ・ 総称 シカ

b) 猟師言葉

- ・ 雌 オヒメサン, カンザシ, メガ, ワスレ
- ・ 角なし (雄, 場合によっては雌も含む。) サンザイボウズ, ボウズ, ボンサン
- ・ 生えかけの短い角の状態 ボンチ
- ・ 枝別れしていない角の状態又は枝分かれしない角 イチノマタ, イッポンヅノ, ゴボウ, ゴンボ, ゴンボヅノ, ズガ, ズワ, ナガヅル, ホンヅノ
- ・ 2段角の状態 ニノマタ
- ・ 3段角の状態 サンノマタ
- ・ 3段角で立派な状態 オオザン
- ・ 3段角にならない大型の2段角の状態 ジョウニ
- ・ 3段角であるが3段目が小さい状態 チョコザン
- ・ 4段角になりかけの状態 ゴゾロ



④ 生息及び呼び名の状況

近年では生息個体数が増え, 山辺の集落でも見かけることがあるが, 当時は鈴鹿山系の山奥でのみ見かけられたという。

本種の呼び名としては, 「シカ」や「サンノマタ」をはじめ計24種を採録した。

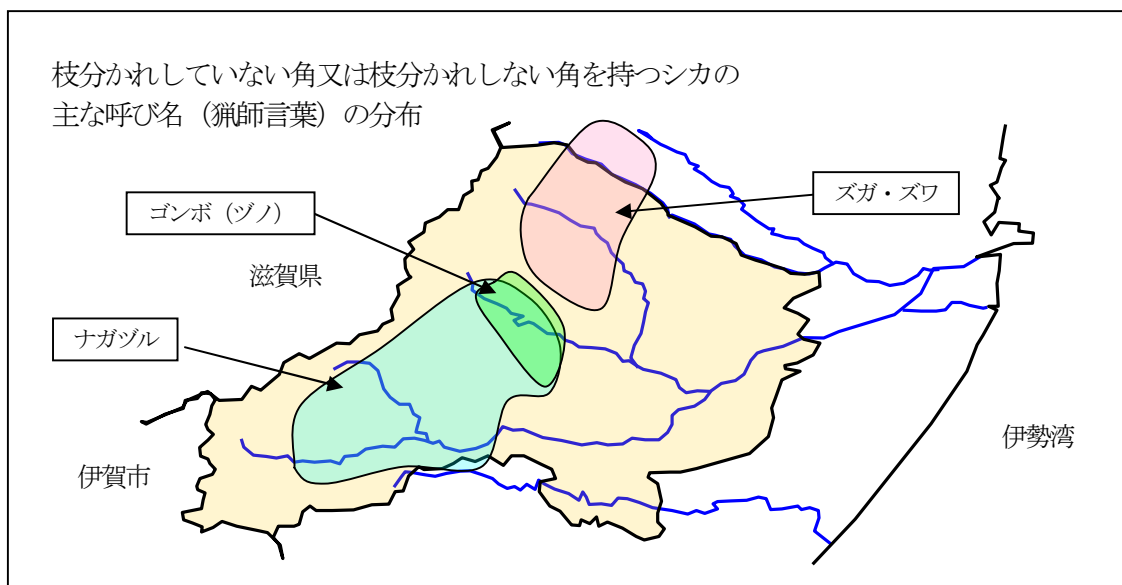
一般の人々からは一般的な和名である「シカ」と呼ばれる一方, 高齢の猟師又は元猟師の間では角の有無やその大きさ等の状態により区別された様々な呼び名がみられた。

枝分かれをした角を持つシカは「ニノマタ」, 「サンノマタ」等と呼ばれ, 郡内でほぼ共通していたが, 枝分かれしていない角又は枝分かれしない角を持つシカの呼び名は加太地区から野登地区にかけて「ナガヅル」と呼ばれたほか, 野登地区で「ゴンボ (ヅノ)」, 庄内地区から, 椿地区, 水沢地区 (三重郡) にかけて「ズガ」, 「ズワ」と呼ばれ, 地域間で違いがみられた。

なお, 近年では生息個体数の増加に伴い幼体がしばしば見かけられ, 「バンビ」等新しい呼び名も使われるようになってきているという。

⑤ その他

シカは「カイホウ」と鳴くという。



(17) カモシカ (ウシ目ウシ科)

① 対象種

ニホンカモシカ

② 生息情報

山辺の集落

③ 採録した呼び名 (猟師言葉等)

- ・ 鳴き声 シャー
- ・ 岩の上で長時間いる習性等
アオ, アホ, ノロ, ボケ
- ・ その他 ニク, ニクタ



④ 生息及び呼び名の状況

近年では生息個体数が増え、鈴鹿山系の広い範囲で見かけることがあるようであるが、当時は滋賀県との県境となった鈴鹿山系の尾根付近、とりわけ明星ヶ岳以北の山深い地域で見かけられ、シカの生息地よりさらに山奥に生息していたという。

本種の呼び名としては、「アホ」や「シャー」をはじめ計7種を採録した。

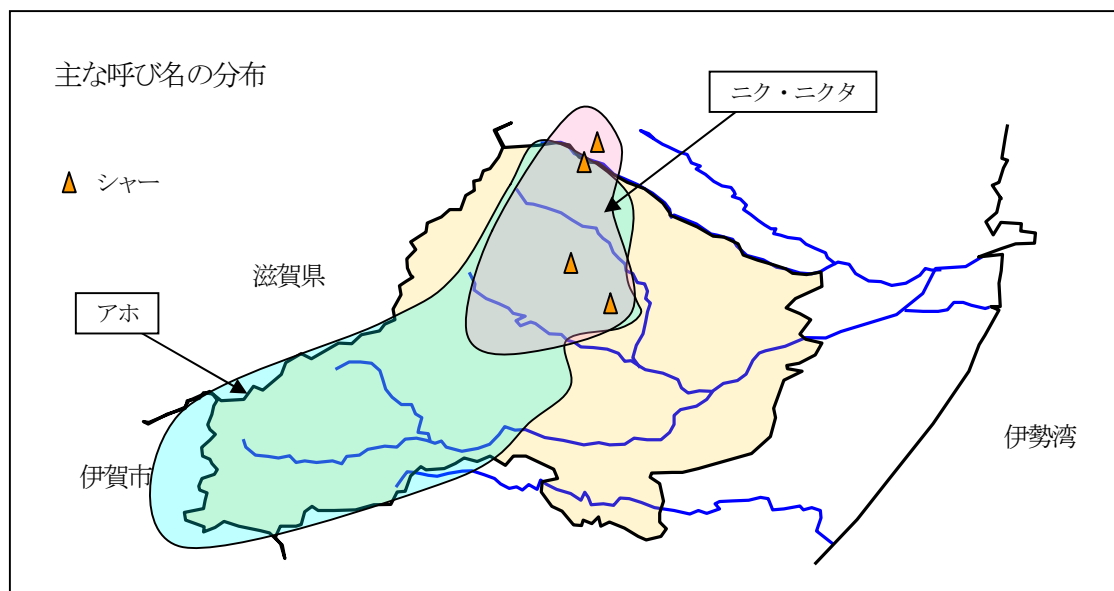
狩猟や炭焼きで鈴鹿山系の奥山に入る人々以外には見かけることはなく、そうした人々の呼び名として採録した。

岩場の上に立ち長時間動かずに同じ方向を見続ける習性があるようで、そうしたことから山辺の集落全域でよく「アホ」等と呼ばれた。また、野登地区から庄内地区、椿地区にかけては「ニク」又は「ニクタ」と呼ばれ、庄内地区から水沢地区 (三重郡) にかけては鳴き声に由来する「シャー」と呼ぶ集落もあり、地域間での違いがみられた。

なお、こうした呼び名の一部は猟師の間で本種を示す隠語として使われたとも言う。

⑤ その他

聴き取りから、多くの被聴き取り者から「カモシカは声を掛けると止まり、赤い布を振るとじっと見ている」という話がみられた。



(18) ウシ (ウシ目ウシ科)

- ① 対象種
ウシ
- ② 生息情報
全集落
- ③ 採録した呼び名
 - ・ 雄牛 コッテ, コッテウシ
 - ・ 子牛 (場合によっては雌子牛)
コベ, ベコ
- ④ 生息及び呼び名の状況



近年では身近に見ることはできないが、当時は郡内の各農家で広く飼われ、農耕用として使われた身近な生き物であった。

本種の呼び名については、雄牛と子牛に分けて聴き取りを行い、それぞれ2種、計4種を採録した。

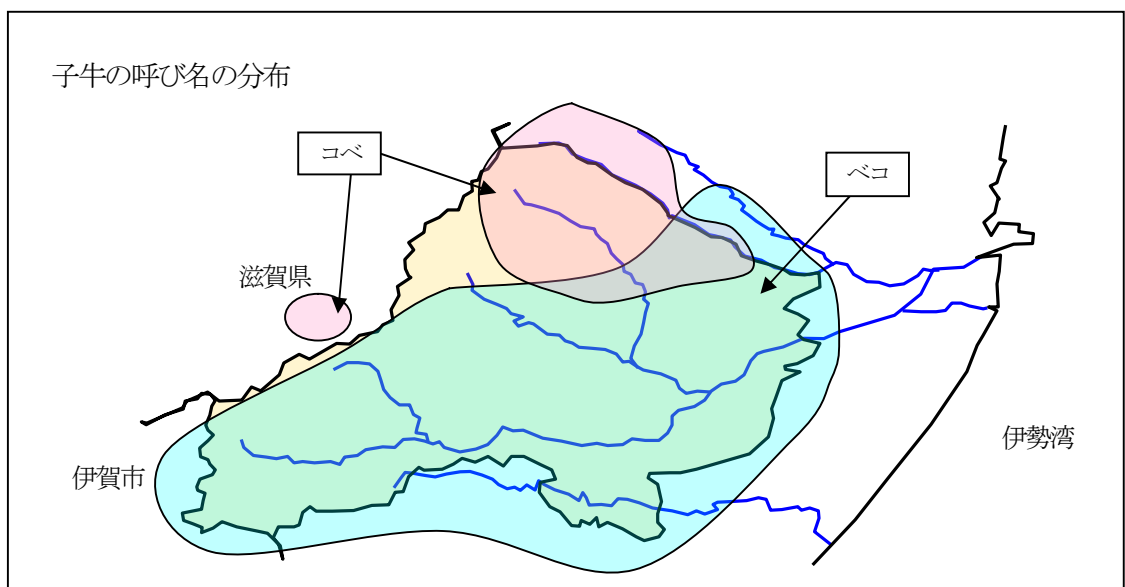
雄牛は郡全域において「コッテ」又は「コッテウシ」と呼ばれ、雌牛に対する雄牛の呼び名として、また思うようには動かない雄牛を形容する言葉として使われた。

子牛は郡の広い範囲において「ベコ」と呼ばれたほか、郡北部の庄内地区、深伊澤地区、椿地区、久間田地区から水沢地区（三重郡）にかけての地域では「コベ」と呼ばれた。

また、周辺地域として聴き取りを行った甲賀市土山町山中でも「コベ」と呼ばれ、併せて「昔は四日市の博労から牛馬を購入していた」という話がみられたことから、こうした子牛の呼び名の分布は、当時牛馬を扱った商人の商圏との関係が考えられる。

なお、雌牛は一般的に「メス」、「メン」、「メンタ」と呼ばれるとともに、牛が狂ったように鳴く状態になると「カモがでる」と言ったり、そういった状態となった牛は「カモウシ」と呼ばれたりした。

- ⑤ その他
聴き取りから、「牛は賢い動物である」という話がみられた。



(19) その他

① ニホンオオカミ (ネコ目イヌ科)

本種は明治後期には絶滅したとされていることから、昔の呼び名の聴き取り対象としなかったが、山辺の集落を中心に昔からの伝承についての聴き取りを行った。



a) 生息場所と遠吠え

明治時代以前の話と考えられるが、加太、野登、椿地区等の集落において、昔は鈴鹿山系の奥山にオオカミがいたという話や、炭焼きのため山奥で泊まると夜中にオオカミの遠吠えが聞こえたという内容の伝承が多数みられた。

また、亀山市関町古厩から鈴鹿市稲生に続く丘陵部にあった山道である金王道、並びに鈴鹿川中流部の山林や内部川にも大昔にはオオカミがいたという伝承が沿道(川)集落に残されていた。

b) 習性

人前を歩く「迎えオオカミ」、後ろを歩く「送りオオカミ」と言われるとともに、「オオカミがいる時にこけると襲われる」、「オオカミは夜中に溜めの小便を飲みに来る」といったオオカミの習性についての話がみられた。

c) 海との関係

オオカミが伊勢湾へ潮を飲みに行くという伝承が沿道(川)集落に残り、伊勢湾に至る次の3ルートがみられた。

- 金王道～白子ルート：「昔はオオカミが金王道を通り、白子の海まで潮を飲みに行った」
- 安楽川～伊勢湾ルート：「昔はオオカミが安楽川を下り、海へ潮を飲みに行った」
- 内部川～伊勢湾ルート：「昔はオオカミが内部川を下り、海へ潮を飲みに行った」

d) その他

「嘘をつくともオオカミが追わえてくるぞ」等と、昔は子どものしつけによくオオカミが使われたという。

なお、亀山市川崎町内には「オオカミ坂」と呼ばれる場所があり、オオカミと関係した何らかのいわれがあるものと考えられる。

② ニホンツキノワグマ (ネコ目クマ科)

本種は郡域での生息情報がほとんどないことから、昔の呼び名の聴き取り対象としなかったが、山辺の集落を中心に昔からの伝承についての聴き取りを行った。



聴き取りからは、「鈴鹿の山は浅いので熊はいない」という話がよくあり、当時から近年にかけての生息に関する話もほとんどみられなかった。

一方、大正時代以前の話と考えられるが、「稀にクマが里にでてきた」という伝承がみられた。また、昭和時代の初め頃に庄内地区又は椿地区の奥山に木の皮が剥がされた痕が残されていたことがあり、それを見た紀州の猟師が「伊吹山系から紀伊半島へ移動して行くはぐれグマが残したもので、そこで生息しているクマではない」と地元の猟師に語ったという話がみられた。